医学図書館界に入って

恩 地 宏 和*

医学図書館は普通人々が図書館という言葉に耳にして受ける感じからは、かなり違った色合いを持つといえよう。それは単に研究者や学術機関に奉仕する図書館であることだけに根ざすものではなく、まさしく医学図書館が医学という自然科学の特殊な一分野に限られた専門図書館であることに由来するからであらう。

広い意味で人間の生命を守り、その活動を促すためにはたす医学の役割が、社会生活のなかで極めて大きな意義を持つことは、いまさらここに述べるまでもない。だからこそ、現代の社会において、医学は夜を日について短期間に長足の進歩を重ね、その研究範囲はどんどん広がり、学術文献の数も、年を追ってねずみ算式に増加し龍大なものになりつつあるのだ。このような観点から医学図書館員に負わされた任務を考えるならば、現在の医学図書館はさまざまな事情に制約されて、大なり小なり不十分な活動しか行っていないことを認めねばなるまい。

医学図書館の持つ問題点は、このたちおくれた実状を認識し、そこから如何にすれば日進月歩の医学界に奉仕しうる図書館たりうるかを考察して、その実現に最適の方策を練るということにあるのではなからうか。

既に米国では MEDLARS 等による機械検索も実用化の段階にうつされ、これからの医学図書館界はなおめまぐるしくその相貌を変えるであろうが、もし医学図書館員がその発展についていけなければ、やがては無用の長

物として容赦なく見捨てられてしまうことは全く明らかである。

それではわれわれは、医学図書館活動改革のいとぐちをどこに見出すべきか。

真に医学研究に奉仕できる医学図書館員でありうるためには、まず現職館員の質の向上をはからなければならない。研究者の信頼をうるためには、われわれ自身が技術的に数段高く登ることが絶対に必要なのである。医学図書館員としての専門職員を養成する適当な教育機関がない現状では、これはさしあたり各館の事情に応じて、或いは館員各自の工夫によって解決されなければならない。次に医学図書館としての機能を文献探索面に向けて充分発揮できるよう、内部の機構を改革する必要がある。どのような形であれ、医学文献の調査・探索こそは、これからの医学図書館の進むべき道であり、また中心的な活動分野になるであろうから。

以上のような前提があつてこそ、はじめて研究者の図書館員に対する認識もあらためられ、またこれにともなつて社会一般の医学図書館を見る目も徐々に変ってくるであろうし、専門職員の養成機関設置の必要性も叫ばれ始め、身分制度も確立されるに至る道が開けるであろう。

このように眺めてくるとき、われわれの職場の環境を変える活動の第一歩は、まずわれわれ自身の努力によって、最も合理的方法で、われわれの持つ才能を外に引き出すことから手をつけなければならないことがわかる。この場合注意しなければならないこと

* Hirokazu ONCHI 奈良県立医大図書館

は、裏田武夫氏も指摘される如く¹⁾、ただいたずらに他国の模倣に終るのではなく、わが国のおかれた現実の諸条件から出発しなければならないということである。この意味からは、医学図書館界にはあまりにも多くの「天衣無縫な輸入業者」がいる事実、われわれは注目し反省しなければならないだろう。

ところで医学図書館員たらしめるものは①基本的に三ヶ国語を理解でき、②主な二次資料の使い方に習熟し、③基礎的な医学の知識を持っていなければならないといえよう。これは医学図書館員の質の向上をはかるため、当面われわれが達成すべき、最も基本的な、最少限の目標である。

私たちの図書館では、今度新しく文献調査係をおき、文献探索サービスを開始する計画を立てているが、さしあたりそのテストケースとして館長より、教授会にはかる信頼度の資料とするための問題を医学の諸分野から提出してもらい、実際に検索してみたところ、館長をはじめ研究者から好評を博したので、われわれ館員も大いに元気づけられ、さしあたりレファレンス・サービスの準備に、事務の合理化にとますます意欲をもやしている。人員の問題、われわれの技術の問題等数々の困難をのりこえながら、既にわれわれの図書館では、すべての館員が主な二次資料の基礎的な知識と、実際の使い方に習熟しているのである。

医学図書館員は実際の文献によって英、独、仏、露語の練習をするほか、場合によっては伊、ラテン、ギリシア、スペイン、中国語等も初等文法から学ばねばならぬであろうが、私自身は特に最近必要性の高まりつつある露語の勉強と、医学用語を理解する上で不可欠なラテン語の知識をうるために努力するつもりである。二次資料は IM, BA, CA, EM 等の特徴と coverage 等をよくのみこんで実際に検索をやってみる。基礎医学の知識とし

ては、まず生理学から始めることにした。

(岩波全書「人体の機能」をテキストとして使用)これには時間割を作成し、電車の中や休み時間も利用して日に10分でも15分でもよいから、毎日続けてやるように努めている。図書館でも正式に教授会にはかって、医学部の講義を聴講する年次の計画も立てられている。

ところでもし館員のあいだに、さきにあげた三つの目標に対する努力を厭う傾向がみられるとすれば、その人にはもはや医学図書館で働く資格はないと断言してもよいであろう。そのような寄生虫的存在が医学図書館界から少なくなればなる程、医学図書館の意欲的な活動はますます盛んになって行くことは自明の理である。

医学図書館は単なる「図書館」とどまっていってはならない。それは教育と研究の場にならなければならない。大学が教育と研究の場である以上、実際問題としてその活動に図書館がどのような方法で、どの程度参加し協力するか、図書館員の仕事と教育・研究がどのような形で結びつくべきであるのか、それはわれわれ図書館員にとって、今後に残された大きな課題であろう。

注1) 裏田武夫：医学図書館員教育一現場をもつ科学の立場から—医学図書館
13(2)90~91, 1966

* * *